

図 2 SA 日報データ入力画面

3.3 SA 日報を検索する機能

SA 日報は時系列で記録されるフロー情報であるので、SA 日報から具体的な授業テーマに応じた SA 業務のための知識を引き出すためには、その日報を検索する機能が必要とされた。そこで、授業テーマのキーワードを用いて日報内を全文検索する機能と、SA 関係者が編纂するオントロジー情報をもとに、日報内の意味的な検索を可能とする機能を開発した[3]。“Excel”と検索した例を図 3 に示す、図 3 は Excel と関連性の高い日報が順に表示されている。



図 3 SA 日報の検索結果一覧の画面

4. 運用を通じた評価

2010 年 10 月より、大学内に本システムを運用する Web サーバーを設置した。TA/SA Form を通じて、情報関係科目を担当する SA の 21 名（1 年生 3 名、2 年生 8 名、3 年生 3 名、4 年生 7 名）の登録がなされ利用が開始された。これまでに延べ 107 件の日報が登録されている。

本システムを利用している SA（4 年生：SA 経

験 2 年）へヒアリングを行ったところ次のような意見が得られた。

- 「前回までに日報として蓄積した情報を、SA 担当時間内においても参照することができ、非常に便利である。」
- 「自分の過去の日報を参照することで、担当クラスの授業内容の進捗状況を確認したり、その中での自分の気付きについて思い起こしたりすることができるようになった。」

と言う回答を得られた。これにより、短期的な効果として、本システムを通じ、日報を電子化したことで参照性が向上されたことが確かめられたと言える。また、過去蓄積されてきた紙媒体の日報は閲覧性が低く、日報を管理する担当者によると実際に参照される機会も少なかった。しかし、本システムを通じ実際に日報を参照し、知識の再確認を行う学生が現れたことは、日報への意識が、「規則の上で書かされていた物」から、「自らの活動・知識を記述する報告書」への意識変化に繋がると期待できるものと考えられる。

5. まとめ

本稿では、SA における SA 組織の質を改善させるため、個人の日報データを電子化し、組織内で共有するという方法を提案し、共有方法としての検索システムの開発について述べた。また、この実装を筆者の所属する大学での SA 組織に適用した事例を示して、実際に効果があることを明らかにした。ヒアリングの結果得られた回答から、データの蓄積度合いや、ユーザ辞書の拡張などの、利用内容の充実に応じた効果の高まりが期待できるものと考えられる。本システムのより長期間での運用を行うことを通じて、SA 活動の改善、教育・学習の改善に効果の度合い、検索システムの有用性についての検証をすることが今後の課題である。

参考文献

- ・[1] エティエンヌ・ウェンガー、野中 郁次郎（著）、他『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践（Harvard Business School Press）』翔泳社（2002）
- ・[2] Toby Segaran（著）、當山 仁健（翻訳）、鴨澤 眞夫（翻訳）『集合知プログラミング』オライリージャパン（2008）
- ・[3] 瀧上信光 監修 宮崎緑 編『大学維新への挑戦』中央公論新社（2010）